花も、酒も

―七四春闘に―

詩・すぎもと　かずお

花が咲いて
いっ杯飲もうかと
花見の話題が
昇坑人車の坑夫を包んだが
「ことしは花見もでけんばい」と
だれかが投げつけると
一瞬
微妙な動揺が起った。

冗談をとばし
いちだんと饒舌になる時間」
「ホルモンで栄養つけるか」
「やきとりがよかばい」
「焼酎でいくか」
そんな声と交錯して
「公休出勤でん残業でんせんなら」
「ストライキでな飯しゃ食えんばい」
いびつな習性に嘲笑があり
坑夫の脳天に
『石炭見直し』が突きささってくる。

リンビー炭鉱の労働者が
―三カ月の超過労働の拒否
　そして二十日のストライキ―
幹部と炭鉱労働者の固い握手
追いつめられた〝奴ら〟
「これは本物だなあ」。

空知の雪も
もうとけただろう
三池の花も
雨にうたれて散ってしまったが
あらためて
腹わたをゆさぶる
こう笑の渦のなかで
でっかい味のする
酒を汲もう

今こそ〝組織〟の力を

中央学習会で学び合う

―炭婦協の中央役員を迎えて―

去る四日から六日まで、全国炭婦協の福井よし枝会長（北海道）湯上ゆき書記長（高島）、一戸キヨ・秋本カヨ代表幹事、深松静子九州炭婦協幹事の五名の人が、春闘や参院選勝利に対する組織点検のため来組されました。

主婦会では、たまたま春闘座談会の開催中で、来組早々、万田地区春闘座談会に出席。激励と連帯のあいさつの後、座談会にはいっていただきました。

翌五日、中央学習会を開催し、福井会長、一戸代表委員から次の講演をしていただきました。

石炭（エネルギー政策）と米（食糧政策）が、日本の危機だといわれています。いまこそ資本家のもうけ本位の外国の石油依存のエネルギー政策から、石炭を大切にする政策に変えさせて行きましょう。

また日本の政治は、軍国主義の方向に歩きだしています。国の総予算の三分の一を四次防に与え、自衛隊増強に狂奔している。その証拠に三矢作戦暴露でもわかるように、十八才以上の青少年は、自分を生んだ親さえ知らない間に防衛庁で調べられ、しかも、過去侵略戦争で愛する夫や、わが子の命を奪っていった赤紙さえちゃんとできあがり、名前を書き込むだけに準備され、倉庫にぎっしりつめられています。

いま物価高と低賃金のため、主婦会員の大部分は働きにでておりますが、私たちの生活や生命を守るものは、一丸となって団結し、行動できる組織の力だけです。

そのために六月に行なわれる参議院議員の選挙でも、年金や石炭問題などで活躍されている阿具根登現参議を、民間労働組合の総意で押すことになっています。北海道でも、いまヂャンヂャン阿具根さんで頑張っています。どうか三池のみなさんも、稼ぐこと以上に生活や生命を守るために大切な参議選も頑張って下さい。

なお一戸代表委員からは、芦別町会議員も三期目だという経験から、女性が市会や町会の議員にでることの意義についての話があり、大変意義のある学習会となりました。（この項島文枝）

〝春闘〟で春を知る

神田町　一主婦

二～三年前までは、わが家の窓からも菜の花畑がながめられ、貧しい者にも春の息吹が伝わってきたものである。

ところが公害で田畑汚染が表面化してからというもの、菜の花も咲かなくなった。今ではわが家では、「春は春闘にて知る」、というのが実感である。

一歩買物に出ると、ついこの間まで二百円だったのが三百円になっている。小さいわが子が親のふところ具合も知らず、あれが欲しい、これを食べたいとねだるのをなだめながら、腹立たしい思いで帰るのがオチである。

それでも毎日の新聞やテレビは国民春闘だというのに、公害に怒り、物価高に怒り、職場の悪条件に怒る国民は登場せず、「国民を困らせるストをやるとは何事か」「三万円も賃上げするなら、またまた公共料金や物価を上げざるを得ないだろう」……ETC。公害をつくり出し人工的に物不足をつくり出してきた大企業や、政府の論法がそこでまかり通っている。だまっていれば、押しつぶされる。春闘も地域ぐるみに広がることを願うが、ともかく春は春闘にて知る季節感が、わが家ではぱっと続きそうである。（紙面のつごうで、抜萃となりました。あしからず）

花見寸感

四山指導部　南場　勇

桜の花も四月六～七日が見ごろで、どの職場もその話ではずむ。私たちもそれにたがわず、延命公園に夜桜見物に行った。

いざ公園の中に入ってびっくりした。人、人、人！　桜の下といわず、どこでも家族連れや職場グループ等でうめつくしている。

やがて散り行く花の下に座り、酒を飲み、妻の作ったベントウを食べながら、心良い春の夜風に吹かれていた。

後ろの方で、騒々しくなった。「喧嘩だ」。せっかく楽しんでいるまわりの人に、嫌な思いをさせるものだ。

また別のグループでは、一人が酒の勢いで桜の木にのぼり、「花吹雪だ」と桜の枝をゆさぶり、あげくの果てには枝を折る。そのグループの人たちもそれを止めるどころか、返って一緒にワーワーはやし立てている。自然を愛し、桜の花見を楽しみにきたのだろうか。

道路には、だらしなく酔いつぶれて倒れている者がある。そんなことを、とかく「酒の上でのことだから」と、大目に見る向きがある。酒に飲まれては、酒を飲む資格はないと思う。

しかしこの人たちも考えて見ると、必ずや日常職場の中で、積もる不平不満を押さえられていて、それがこうした実態となって爆発するのかも知れない。やがて少し離れたところから、「ガンバロー」の合唱が聞えてきたので気分もさわやかになった。目をやると、三池労組の仲間だちだった。

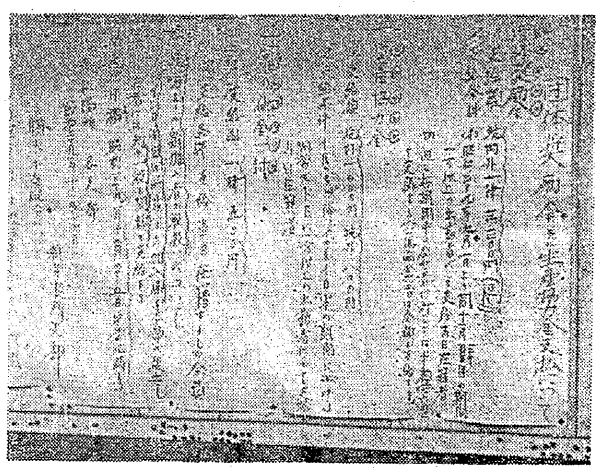
さらによく見ていると、その場所をひきあげるときもきちんと後片ずけを行なっている。「さすがだ」と思ったが、たとえどんな場所でも労働者としての自信と誇りに満ちているのであろう。

私の見たまま感じたままを書いてみたが、あんな場所でだらしなくなる人たちも一日も早く、本当の労働者としての自覚を高めてくれることを、願わずにはいられなかった。

いわれなく続く差別

三井独占の労働者支配と同じ

三池と解放同盟（その3）



ある日見た、三池新労組の掲示。そこに資本の差別支配がありありと顔を見せている。

さて、被差別部落はわが国に六千部落があり、その人口約三百万人といわれている。（久留米市教育委員会発行〝部落の歴史〟による）

この被差別部落とそこに住む人々は、長く続いてきた差別支配からの解放は名ばかりに、かえって解放令を口実に、それまで課されていなかった税金を押しつけられ、兵役の義務は一般とまったく変ることなく背負わされ、つまりまる裸にされて近代資本主義の荒々しい歩みのなかに投げ出されたのだったからたまったものではなかった。

前掲資料によれば、福岡県下のある被差別部落の人々は、その日その日を生きるために、多くは男衆と呼ばれながら奉公へ出、あとに残った人々はといえば、まったく生産性の貧弱な田畑にしがみついて、爪にローソクを灯すように細々と生計を維持するか、あるいはゾウリやカマスなどをつくりながらみじめに生きてゆく以外に道はなかった。

同資料は、非情な実態を、次のようにも述べている。

「晴雨にかかわらず、奉公先で食事をとるのはうまやの前か庭の片隅ときめられていたそうです。部落の人たちが買物に行くと、商人たちはその金をザルに受けとめ、水で洗いこむというようなことが平気で行われ、いわれなき偏見はいつまでも消えませんでした」

いわれなき偏見―その一番よい例が〝竹槍一撥〟であろう。

明治六（一八七三）年といえば、福岡地方は未曽有の干害に見舞われ、農民は凶作に苦しんだのだった。だが手加減することのない、維新政府の苛斂誅求怒りが爆発するのは当然だった嘉穂郡二十七カ村の農民たちが竹槍を手に手に蜂起。次々に相場師たちの家を襲い、米屋、酒屋など富家と呼ばれる家々をたたきこわしていった。

ところがどうだろう、竹槍一揆の攻撃目標がいつの間にか被差別部落の方へ向けられ、あるまいことか、それらの部落への襲撃に一転していったのだった。

「実に徹底した襲撃が行なわれ、県下の大半の部落が焼き打ちにあい、その地区を調べると当時の部落数と分布状況がわかるといわれたぐらいです」――と、前掲資料は伝えている。

以上のことは、嘉穂郡二十七カ村の農民の怒りがそれ以上広がることを恐れた、当時のわが国の支配層の手により、巧みにゆがめられていき、同じ人民同志を敵対させることによって、すっかり矛盾をさらけ出した天皇制支配の維持がたくまれた、もっともよい例である。

差別は太平洋戦後も続き、それは〝狭山差別裁判〟（三十八年埼玉県狭山市で起きた、恐喝未遂・女高生殺害事件。紙数の関係で紹介は略）に典型を見るだろう。

思えば、約一世紀も遅れてスタートしたわが国の資本主義が外国の先進刻強に追いつき、競争に勝つためにはどうしても生産原価を安くおさえねばならずひいては低賃金が先決条件となり、あの女工哀史のようなむごい人間無視の労働が強制されたのだったが、その日本資本主義発展のためには、一部の被差別部落と、そこに非情に生きる人々の存在は、絶対必要なものだったのである。

ちょうど、三井独占資本にとって、三池炭鉱労働者の闘う組織の分裂と、これをテコとする差別支配が絶対不可決なこととまったく同じように。